enoco［study?］ #1

CLUSTER 友枝望

置物解説

信楽焼狸

信楽焼の狸の置物の歴史は比較的浅く、明治時代にの藤原銕造氏が作ったものが最初と言われている。1951 年（昭和 26 年）、昭和天皇が信楽町行幸の際、たくさんの信楽狸に日の丸の小旗を持たせ沿道に設陶芸家置したところ、狸たちが延々と続く情景をお気に召され、歌を詠まれた逸話が新聞で報道され、全国に知られるようになった。信楽町長野・新宮神社に歌碑が建っている。縁起物として喜ばれ、狸が「他を抜く」に通じることから商売繁盛と洒落て店の軒先に置かれることが多い。信楽焼八相縁起に因んで福々とした狸が編み笠を被り少し首をかしげながら右手に徳利左手に通帳を持って突っ立っている、いわゆる「酒買い小僧」型が定番となっている。

置物解説

山鳥·キジの剥製（韓国）

学術研究·展示、鑑賞を目的として流通している。とりわけ美術の教育機関などでは、絵画やデッサン用モチーフとして重宝される。キジ目キジ科キジ属の鳥の一種。日本の国鳥。また国内の多くの自治体で「市町村の鳥」に指定されている。コウライキジ（学名が P. colchicus）の亜種（P. colchicus versicolor）とされる場合もある。種小名の versicolor は、ラテン語で「色変わりの」を意味する。日本の古語では「雉子（きぎす）」。

キジやコウライキジは、世界中で主要な狩猟鳥となっている。キジ肉は食用とされている。

置物解説

蛙（ 親子カエル ）

縁起物となったのは、「人をむかえる」「幸せをむかえる」「無事かえる」「金かえる」「雨を呼ぶ（豊作）」「「子宝に恵まれる(卵をたくさん産む)」などに通じる。体の部分にちなんだ縁起もあり、「口」は火の災いを飲み込む「火災予防」、「皮膚」は保護色のため「災難を避ける」、「後足」：強固な足で「飛躍前進」などがある。また「食べ物」は、毒虫や害虫を食べるので「無病息災」に例えられ、「親子カエル」は常に親の「責任を負い」子は親に「従順」であるといった意味合いが込められている。西洋でも、「子宝」「繁栄」「豊穣」を象徴するとされる。

置物解説

古民家（水槽装飾）

　水槽装飾用、民家をかたどったアクセサリー。水中に沈めて魚とともに鑑賞するオブジェ。
水中に簡単に沈むよう、モルタル質の素材が使われており、大小の穴が各所に開けられている。
　また、民家（みんか）とは、一般の庶民が暮らす住まいのことで、支配階級、上層階級の住まい（王宮など）に対比して用いられる言葉。民屋（みんおく）ともいう。
　日本建築史や民俗学では、主に江戸時代の農家、町家の類を民家という。明治時代以降に建立された住宅で、伝統的様式・技法を用いたものもこれに含まれる。また、中・下層の武士の住まいも農家と同様の技法が用いられているものは民家に含める。（本項で詳しく述べる）
　現代日本語では、団地やマンションなどの集合住宅に対して、一戸建ての比較的小規模な住宅を指して「民家」と呼ぶことがある。特に報道文などで「土砂崩れで民家が押し流され」などと使う。

犬

　動物インテリアグッズの一つ。犬を飼う飼い主は、ペットと同じ種類の犬の置物を飾ることができる。風水的には犬の置物は獅子やシーサーと同じような効果があり、設置の正しい方法は、邪気を祓うために雌雄一対で玄関の外に置くなどする。

置物解説

ア ヒ ル

主に庭や玄関に飾られることが多い。アヒル（鶩、または家鴨）は、水鳥のカモ科のマガモを原種とする家禽で、生物学的にはマガモと同種である。ヨーロッパや中国などで飼育が始まり、飼育が容易なこともあり、世界中で幅広く飼育されているアヒルをモチーフにしたラバーダックなどキャラクター商品もある。

置物解説

猫

猫好きにはたまらない動物インテリアグッズ。ネコ（猫）は、狭義にはネコ目（食肉目）- ネコ亜目- ネコ科- ネコ亜科- ネコ属に分類される小型哺乳類であるイエネコ（学名 : Felis silvestris catus）の通称である。人間によくなつくためイヌと並ぶ代表的なペットとして世界中で広く飼われている。猫を飼う飼い主は、ペットと同じ種類の置物を飾ることができ、風水的には基本的にどこに置いても良いらしい。

螺鈿

螺鈿（らでん）は、主に漆器や帯などの伝統工芸に用いられる装飾技法のひとつ。貝殻の内側、虹色光沢を持った真珠層の部分を切り出した板状の素材を、漆地や木地の彫刻された表面にはめ込む手法、およびこの手法を用いて製作された工芸品のこと。螺は貝、鈿はちりばめることを意味する。

使用される貝は、ヤコウガイ（夜光貝）、シロチョウガイ（白蝶貝）、クロチョウガイ（黒蝶貝）、カワシンジュガイ（青貝）、アワビ、アコヤガイなどが使われる。はめ込んだ後の貝片に更に彫刻を施す場合もある。

龍

竜（りゅう、りょう、龍）は、中国神話の生物。古来神秘的な存在として位置づけられてきた。旧字体では「龍」で、「竜」は「龍」の略字である[1]。「龍」は今日でも広く用いられ、人名用漢字にも含まれている。十二支に各々動物が当てはめられた際、唯一採用された伝説上の生物である。なぜ辰だけが想像上の動物になったのかは未だに議論の的であり、定説がない。一つの仮説として、かつては竜も実在の生物であり、のちに伝説化したのだとするものもある。日本では、様々な文化とともに中国から伝来し、元々日本にあった蛇神信仰と融合した。中世以降の解釈では日本神話に登場する八岐大蛇も竜の一種とされることがある。古墳などに見られる四神の青竜が有名だが、他にも水の神として各地で民間信仰の対象となった。

。

通行手形（伊勢志摩国立公園）

通行手形（つうこうてがた）は、江戸時代の日本で人（一部例外を除く）が旅をしようとするときに、許可を得て旅行していることを証明した物。その許可の証として旅行中所持していることを義務付けられ、現代の通行証やパスポートに相当する。江戸時代には各地に関所や口留番所が設置され、人の移動は厳格に制限された。公用・商用の旅、参詣や湯治などの遊行、女性の場合には婚姻や奉公など様々な理由での旅があるが、一般に庶民の旅行は自由ではなかった。しかし、伊勢参りの旅については例外的に無条件で許されていた。その他、日光東照宮参詣、善光寺参詣など、有名寺社の参詣旅も概ね許されていた。現在各観光地では、お土産品、記念品などとして販売されている。

盃

盃（さかずき）は、主に日本酒を飲むために用いる器。坏あるいは酒坏とも書く。小さなものは盞ともいう。盃は、通常、酒を飲むために使用される。日常の飲酒から、神道の結婚式や神事などフォーマルな席まで、色々な場面で使用される。また、酒を飲む以外にも黒田節を舞うための道具、優勝した際に渡される賞品（トロフィー）、勲章・褒章などと共に授与される賜杯などとしても用いられる。

置物解説

DIA-PIN（ボーリングのピン）

ボーリングのピンはレーンの先に設置された棒状のもの。中に重量調整のため空洞が設けてあり、これによりボールが当たったときに爽快な音が出る。

材質：楓、高さ：38.1 cm、最大径：12.1 cm （世界共通の大きさ）、重さ：約 1.6 kg（1,417 g 以上 1,644 g 以下、10 本のピンの重さの差は 113 g を超えてはいけない。

ピンはボールなどの摩擦で磨耗し、重さが減る事がある）

手前からピラミッド状に 10 本設置される。ピンには位置により番号が付けられており、投球者からみて最も手前の先端に当たるピンが 1 番ピン、以下、2 列目左から右へ 2 番、3 番、3 列目左から右へ 4 – 6 番、最終列左から右へ 7 – 10 番ピンである。

こけし鳴子系（鳴子温泉・宮城）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

鳴子系（鳴子温泉・宮城）

首が回るのが特徴。首を回すと「キュッキュ、キュッキュ」と音がする。胴体は中ほどが細くなっていて、極端化すれば凹レンズのような胴体を持つ。胴体には菊の花を描くのが通常である。

置物解説

こけし　土湯系（土湯温泉、飯坂温泉、岳温泉・福島）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約10種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の3つの条件が必要だったと言われている。1つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2つ目は、赤物が伝えられたこと。3つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

土湯系（土湯温泉、飯坂温泉、岳温泉・福島）

頭部には蛇の目の輪を描き、前髪と、鬢の間にカセと呼ぶ赤い模様がある。胴の模様は線の組み合わせが主体。

置物解説

こけし遠刈田系（遠刈田温泉・宮城）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

遠刈田系（遠刈田温泉・宮城）

頭頂に赤い放射線状の飾りを描き、さらに額から頬にかけて八の字状の赤い飾りを描く。胴は手書きの花模様で菊や梅を重ねたものが一般的、まれに木目模様などもある。

博多人形

　博多人形（はかた にんぎょう）は、福岡県の伝統工芸品の一つ。福岡市の博多地区で作られてきた。現在では博多地区外でも多く製作される。経済産業大臣指定伝統的工芸品の一つ。現在では主に、数百円 － 数万円程度の博多人形には化学塗料が、数万円 － 数十万円の博多人形には胡粉彩色が行われているが、伝統を守るという意味では、胡粉彩色の博多人形こそ本来の形と言える。

こけし　土湯系（土湯温泉、飯坂温泉、岳温泉・福島）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

土湯系（土湯温泉、飯坂温泉、岳温泉・福島）

頭部には蛇の目の輪を描き、前髪と、鬢の間にカセと呼ぶ赤い模様がある。胴の模様は線の組み合わせが主体。

置物解説

博多人形

博多人形（はかた にんぎょう）は、福岡県の伝統工芸品の一つ。福岡市の博多地区で作られてきた。現在では博多地区外でも多く製作される。経済産業大臣指定伝統的工芸品の一つ。現在では主に、数百円 – 数万円程度の博多人形には化学塗料が、数万円 - 数十万円の博多人形には胡粉彩色が行われているが、伝統を守るという意味では、胡粉彩色の博多人形こそ本来の形と言える。

置物解説

NAO の人形（磁器）

NAO はスペインのリヤドロ社製のブランド。 1968 年の登場以来、高品質ながらリーズナブルで親しみやすい作品を作り続けている。作品はすべてバレンシアの工房で専門のアーティストによって、ひとつひとつ手作りで仕上げられたポーセリン（磁器）。NAO の純粋なフォルムはコレクションやインテリアとしてだけではなく、友人への贈り物として好まれている。この置物は NAO のベストセラーのひとつで、ちょっとはにかんでうつむいている少女をモチーフとしている。白いドレスの裾に美しい模様が施されている。

置物解説

カバ（木製おもちゃ）

ダール・コペンハーゲン社（RosendahlCopenhagen）が復刻し、生産を続けていたが、2011 年にカイ・ボイスン デンマーク（KAYBOJESENDENMARK）として新たなブランドを設立。口が開き、単純な置物として使うことも可能であるが、口に何かを挟んで収納として使うことや、何かの伝令を伝える伝書カバとして使うことも可能である。

鶏の郷土玩具(笹野彫り)

笹野一刀彫（ささのいっとうぼり）は、山形県米沢市に伝わる木彫工芸品。米沢市笹野地区の農民によって製作されてきた。コシアブラの丸木を、サルキリと呼ばれる刃物で削り、簡単な彩色を施す。代表的な題材は「お鷹ポッポ」と呼ばれる鷹で、「鶏」の他に「もちつきウサギ」「蘇民将来」「恵比寿・大黒」「笠かむり農婦」「カメ」「せきれい」等の題材がある。地元の伝承では、806 年開基とされる笹野観音堂の創建当時から伝わる、火伏せのお守り・縁起物とし、1000 年以上の伝統があると主張している。

藁沓人形（陶器）

藁沓（わらぐつ）をはいた雪ん子の焼き物。

※詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

置物解説

唐人お吉（人形）

本名、斉藤きち。１８４１年（天保１２年）１１月１０日、愛知県知多郡内海に、船大工市兵衛の次女として生まれる。４歳のとき、家族とともに下田に移住。１４歳で芸妓になるが、新内明烏のお吉とうたわれるほどの評判と美貌の持ち主だったという。１７歳のとき、お吉の運命が変わってきた。下田の花とも云われたその美貌が災いしたのか、下田奉行所からの強い要請により、多額の報酬と引き替えにアメリカ総領事のハリスのもと玉泉寺へ侍妾として奉公にへあがることになったのである。

当初、人々はお吉に対して同情的だったが、お吉の羽振りが良くなっていくにつれて、次第に嫉妬と侮蔑の目を向けるようになる。ハリスの容態が回復した３か月後の８月、お吉は解雇され再び芸者となるが、人々の冷たい視線は変わらぬままであった。この頃から彼女は酒色に耽るようになる。

まり

手まり（てまり、手毬、手鞠）は、日本に古くからある遊具（おもちゃ）のひとつである。「新年」の季語。当初は、芯に糸を巻いただけの物であったが、16 世紀末頃より、芯にぜんまい綿などを巻き弾性の高い球体を作り、それを美しい糸で幾何学的に巻いて作られるようになった。ソフトボールよりやや大きく、ハンドボールよりやや小振りのものが多い。

婦人や女児が屋内外で下について遊んだ。室内ではひざまずいてつくこともある。江戸中期以後とりわけ流行し、特に正月の日の遊びとして好まれた。

明治の中期頃からゴムが安価になり、よく弾むゴムまりがおもちゃとして普及して、手でついたり（地面にバウンドさせて）あるいは、空中に打ち上げて遊ぶ。女児のおもちゃで、江戸から明治期には、正月の遊びとされるが、現在では通年の遊びとなっている。

啄木こけし・創作（岩手）

石川啄木の《一握の砂》の歌が彫られている創作こけし。

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

ネコ（DAN CANADA・木彫）

抽象的なネコをかたどった木彫のオブジェ。

※詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

創作こけし

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

置物解説

こけし鳴子系（鳴子温泉・宮城）・高橋武男作

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

鳴子系（鳴子温泉・宮城）

首が回るのが特徴。首を回すと「キュッキュ、キュッキュ」と音がする。胴体は中ほどが細くなっていて、極端化すれば凹レンズのような胴体を持つ。胴体には菊の花を描くのが通常である

高橋武男

大正5年生まれ。平成 17 年没(89 歳)。鳴子の老舗｢高亀｣の前当主、武蔵亡きあと戦後の鳴子こけしの中心的な工人として活躍した。高亀伝承の正統的なこけしを作ってきたが、そのこけしの人気は今ひとつ盛り上がらず、その原因の一つは、自身のこけしに変化があまり見られないこと、戦前の武蔵こけしの復元などは一切しなかった。武男は一本筋の通った工人であり、誰が言っても自身の信念を曲げることはなかった。

置物解説

木彫り熊

木彫りの熊（きぼりのくま）とは、北海道で製造される木製の手工芸品である。北海道土産の代表的な物として日本全国的に知られている。基本的なデザインは、四つんばいになったヒグマが鮭をくわえているものであるが、現在では様々なデザインが存在している。1924年、尾張徳川家の当主であった徳川義親は、旧尾張藩士たちが入植した農場「徳川農場」が立地する八雲町の農民たちの冬期の収入源として、前年にのスイスのベルンから持ち帰った熊の木彫りを生産するよう提案した。このアイデアは当たり、「木彫りの熊」は八雲町に留まらない北海道の名産品として広く認知された。

大黒天

大黒天（だいこくてん）とは、ヒンドゥー教のシヴァ神の化身であるマハーカーラのことである。神道の大黒天 – 密教の大黒天が元になり、大国主命と神仏習合して出来た神道の神で、七福神の一柱としても知られる。日本においては、大黒の「だいこく」が大国に通じるため、古くから神道の神である大国主と混同され、習合して、当初は破壊と豊穣の神として信仰される。後に豊穣の面が残り、七福神の一柱の大黒様として知られる食物・財福を司る神となった。室町時代以降は「大国主命（おおくにぬしのみこと）」の民族的信仰と習合されて、微笑の相が加えられ、さらに江戸時代になると米俵に乗るといった現在よく知られる像容となった。現在においては一般には米俵に乗り福袋と打出の小槌を持った微笑の長者形で表される。

袋を背負っているのは、大国主が日本神話で最初に登場する因幡の白兎の説話において、八十神たちの荷物を入れた袋を持っていたためである。また、大国主がスサノオの計略によって焼き殺されそうになった時に鼠が助けたという説話（大国主の神話#根の国訪問を参照）から、鼠が大黒天の使いであるとされる。

恵比寿（ゑびす）

　日本の神。七福神の一柱。狩衣姿で、右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱える姿が一般的。本項で詳述。また、初春の祝福芸として、えびす人形を舞わせてみせた大道芸やその芸人のことも「恵比須（恵比須回し）」と呼んだ。えびすは日本の神で、現在では七福神の一員として日本古来の唯一（その他はインドや中国由来）の福の神である。古くから漁業の神でもあり、後に留守神ともされた[1]。夷、戎、胡、蛭子、”蝦夷”、恵比須、恵比寿、恵美須などとも表記し、えびっさん、えべっさん、おべっさんなどとも呼称される。えびすはえびす神社にて祀られる。日本一大きいえびす石像は舞子六神社にあり商売繁盛の神社とされている。

置物解説

博多人形・ふみお

博多人形（ふみお）の幸せ。40 年以上に渡って､愛され続ける定番の人形。

博多人形（はかた にんぎょう）は、福岡県の伝統工芸品の一つ。福岡市の博多地区で作られてきた。現在では博多地区外でも多く製作される。経済産業大臣指定伝統的工芸品の一つ。現在では主に、数百円 － 数万円程度の博多人形には化学塗料が、数万円 - 数十万円の博多人形には胡粉彩色が行われているが、伝統を守るという意味では、胡粉彩色の博多人形こそ本来の形と言える。

置物解説

ひえつき人形

　ひえつき人形は宮崎県の郷土人形。壇之浦で敗れた平氏の残党が日向の奥地に落ち延び暮らしていた時代、それを知った幕府は残党討伐のために那須大八(与一の弟)を差し向ける。しかし大八は平氏のあまりの零落ぶりに情を覚え「残党は全て殺害した」と家来を鎌倉に遣わし、鶴富姫の夫として末長く暮らした。金襴の小袖を着ながら稗をつく鶴富姫の姿、栄華を誇った平氏の慎ましやかな暮らしを偲び、昭和のいつ頃からか作られ始めた人形である。

だるま

　だるま（達磨）は仏教の１派である禅宗開祖の達磨の坐禅姿を模した置物、または玩具。現在では禅宗のみならず宗教、宗派を越え縁起物として広く親しまれている。
　多くは赤色の張子（はりこ）で製作され、目の部分は書き入れずに空白のままに残す。そして何らかの祈願を行い、祈願が叶うと目を書き入れるという習慣がある。
　室町時代に日本に伝わった仏教禅宗では達磨大師という僧侶を重要視し、「祖師」の言葉は達磨を表すこともあるほどである。禅宗寺院では達磨大師を描いた掛け軸や札をいわゆる仏像のような役割で用いることが行われるが、この達磨大師には壁に向かって九年の座禅を行ったことによって手足が腐ってしまったという伝説がある。ここから、手足のない形状で置物が作られるようになった。また、だるまは生産される地域によって形状、彩色、材質などが異なっており地域名を冠した名称によって区別されることが多い。

イースター・バニー（陶器）

英語圏やドイツでは、ウサギをかたどったチョコレートやパンが作られる。ウサギは多産なので生命の象徴であり、また跳ね回る様子が生命の躍動を表しているといわれる。あるいは、うさぎの目が、月を思い起こさせ、月は欠けて見えなくなっても、また新月から三日月、そして満月となることからやはり復活を表すものとして、キリストの復活のシンボルとされている。

※イースターはキリスト教において、十字架にかけられて死んだイエス・キリストが三日目に復活したことを記念・記憶する、最も重要な祭。多くの教会で特別な礼拝（典礼・奉神礼）が行われるほか、様々な習慣・習俗・行事がある。

置物解説

ミニチュア（Dove Cottage）

Dove Cottageはイギリスのイングランド北西部、湖水地方（レークディストリクト国立公園）の玄関口にあたるカンブリア州ウィンダミア（Windermere）から13kmほどの郊外にある、同国を代表するロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth、1770～1850年）が1799～1808年までを過ごした邸宅。美しい庭園もそのまま残っている。彼はこのコテージに妻と妹のドロシーとともに住み、数々の名作を残した。「ワーズワースの家」としても知られ、湖水地方の観光のメッカともなっている。

置物解説

ミニチュア（Lifeboat Station）

LAKELAND STUDIOS 製のハンドクラフトミニチュア。

Lifeboat Station （救命艇ステーション）は、イングランド各地に多く点在する王立救命艇国民協会（RNLI）捜索・救出活動のための基地。

王立救命艇国民協会（RNLI）

王立救命艇協会(おうりつきゅうめいていきょうかい、英: Royal National Lifeboat Institution、略号：RNLI)は、イギリス及びアイルランド周辺の沿岸や海における救命活動を行なう、イギリスとアイルランドのボランティア組織である。この組織は、1824 年に国立難破船救命協会(National Institution for the Preservation of Life from Shipwreck)として創設され、1854 年に今の名前に変更された。

イギリスでの活動は完全に、会員費、一般の人からのボランティアによる寄付や遺産により成り立っている。アイルランド政府はアイルランド海域における RNLI の活動を支援するために資金を出資しているが、組織に対して直接の影響力を行使していない。RNLI の本部はプール、ドルセットに存在し、2004 年に新しい訓練学校がエリザベス 2 世女王によって開かれた。

置物解説

ミニチュア（Village Church）

LAKELAND STUDIOS 製のハンドクラフトミニチュア。

Village Church（ヴィレッジチャーチ）はイングランド小村の教会をモチーフとした置物と推察される。

※詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

置物解説

Spring Fever –　ANRI イタリア木彫人形アンリ

ANRI は北イタリア、ドロミテ・アルプスに囲まれた小さな村サンタ・クリスティーナで、1912 年、アントン・リフェサーによって設立された木彫工房である。「アンリ」という社名は彼の名前に由来している。アルプスの厳しい自然の中で、羊飼いたちの手仕事として生まれた木彫工芸は、400 年の時を経る中で、次第に今日の芸術的な製品へと発展していった。正面からだけでなく、360 度どこから見ても細部まで完璧に仕上げられた作品は歳月が経つほどに手放せなくなる美しさをもつ。

天然石・水晶

　天然石（てんねんせき）とは、本来は人工的に合成されたもの以外の鉱物や岩石の漠然とした総称。科学的な定義はなされていない。
　文字通りには道端の石でも石綿でさえも天然石と言える。しばしばバズワードとして用いられ、宝石と呼ぶほどの価値はないが、装飾目的として建材や半貴石に利用できる石に対して、商業的な価値を与えるためにこの呼び名を用いられる。
　一方、しばしば定義や不思議な効能に関する疑似科学的な説明がつけられ、原価と釣り合わない高値で市販されるケースがある。この場合、「パワーストーン」の同義語として扱われる。
　天然石として販売されている石であっても、熱処理や放射線処理によって色調を変化（エンハンスと呼ばれる）させたものや、アクアオーラのように蒸着処理を施したもの、あるいは色素によって直接着色したものなどもある。

いづめこ人形（山形県庄内地域）

昭和 40(1965)年代初めまで、鶴岡では農作業の間、藁で編んだご飯の保温籠「飯詰籠(いづめこ)」に赤ん坊を入れて育てる光景が見られた。その姿をかたどったいづめこ人形は、大正時代初期に大滝武寛という人が、どんぐりのぼうし（殻斗）の部分に布製の人形を入れて作ったのが始まりとされる。その後、籠は藁になり、イグサになって形も大きくなり、おもちゃなどの飾りが付いて、現在の形が完成した。

置物解説

寅（干支）・土鈴

寅（とら、いん）は十二支のひとつ。通常十二支の中で第 3 番目に数えられる。前は丑、次は卯である。「寅」は「螾」（いん：「動く」の意味）で、春が来て草木が生ずる状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の虎が割り当てられた。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

置物解説

こけし（四季こけし）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約10種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の3つの条件が必要だったと言われている。1つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2つ目は、赤物が伝えられたこと。3つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

辻田亮三（Tsujita Ryouzou）

大正１２年神奈川県小田原市生れ。第二時大戦に従軍､後シベリアに抑留される。昭和３４年箱根細工の感化をうけて生地に工房を設立し、木人形の制作にうちこむ｡同３６年日本近代こけし作家協会に所属。小田原工芸会委員

置物解説

木彫り熊

木彫りの熊（きぼりのくま）とは、北海道で製造される木製の手工芸品である。北海道土産の代表的な物として日本全国的に知られている。基本的なデザインは、四つんばいになったヒグマが鮭をくわえているものであるが、現在では様々なデザインが存在している。1924 年、尾張徳川家の当主であった徳川義親は、旧尾張藩士たちが入植した農場「徳川農場」が立地する八雲町の農民たちの冬期の収入源として、前年にのスイスのベルンから持ち帰った熊の木彫りを生産するよう提案した。このアイデアは当たり、「木彫りの熊」は八雲町に留まらない北海道の名産品として広く認知された。

招き猫

招き猫（まねきねこ）は、前足で人を招く形をした、猫の置物。猫は農作物や蚕を食べるネズミを駆除するため、古くは養蚕の縁起物であったが、養蚕が衰退してからは商売繁盛の縁起物とされている。右手（前脚）を挙げている猫は金運を招き、左手（前脚）を挙げている猫は人（客）を招くとされる。両手を挙げたものもあるが、“欲張り過ぎると「お手上げ万歳」になるのが落ち”と嫌う人が多い。一般には写真のように三毛猫であるが、近年では、地の色が伝統的な白や赤、黒の他に、ピンクや青、金色のものもあり、色によっても「学業向上」や「交通安全」（青）、「恋愛」（ピンク）など、意味が違う。黒い猫は、昔の日本では『夜でも目が見える』等の理由から、「福猫」として魔除けや幸運の象徴とされ、黒い招き猫は魔除け厄よけの意味を持つ。また、赤色は疱瘡が嫌う色、といわれてきたため、赤い招き猫は病除けの意味を持つ。

こけし（創作四季こけし）村上けん一作

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

さるぼぼ

　さるぼぼは、飛騨高山など岐阜県飛騨地方で昔から作られる人形。飛騨弁では、赤ちゃんのことを「ぼぼ」と言い、「さるぼぼ」は「猿の赤ん坊」という意味である。災いが去る（猿）、家内円（猿）満になるなど、縁起の良い物とされ、お守りとしても使われている。近年では、土産として飛騨地方の観光地で多く見られる。よく見かける基本形は、赤い体に赤く丸い顔（目鼻口は省かれる）、赤い手足（指は省かれている）、黒い頭巾と黒い腹掛け（いわゆる「金太郎」）を纏い、座って足を前に投げ出しているか両足を広げ、両腕を上げて広げた（いわゆる万歳の）姿である。なお、全身に亘って色が赤いのは、赤は古くから悪霊祓い、疫病（とりわけ天然痘）除けの御利益があると見なされてきたからであるが、近年では赤以外に黄色や緑色などさまざまなカラーバリエーションが見かけられるようになった。

こけし鳴子系（鳴子温泉・宮城）・早坂せつ作

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

鳴子系（鳴子温泉・宮城）

首が回るのが特徴。首を回すと「キュッキュ、キュッキュ」と音がする。胴体は中ほどが細くなっていて、極端化すれば凹レンズのような胴体を持つ。胴体には菊の花を描くのが通常である

早坂せつ

早坂せつ（昭和 10 年生まれ）は、平成 22 年に亡くなられた早坂隆工人の妻。始めは隆工人の木地に描彩していたが、昭和30年頃から、こけしを作るようになったが、隆工人と共に、きわめて風格高く、人気を呼んでいた。女性描彩家の中でも抜群の一人と言われている。

置物解説

ぶた（ガラス細工）

全国各地で製造され、観光地のお土産物やで見かけるガラス細工の小さな置物。

ガラス工芸

ガラス工芸（ガラスこうげい、英語：Glass art）とは、ガラスを用いた工芸・美術の総称である。ガラス造形・ガラスアート・グラスアートと言う場合もある。日用品、骨董・アンティーク、美術品・工芸品、現代アートまで、非常に広い範囲の創作表現方法、創作物を含む。

「ガラス工芸」は、制作工法・素材・年代・地域・素材・メーカーなどに多岐の分類が可能。その歴史は、紀元前以来のガラスの歴史に遡る。

置物解説

招き猫

　招き猫（まねきねこ）は、前足で人を招く形をした、猫の置物。猫は農作物や蚕を食べるネズミを駆除するため、古くは養蚕の縁起物であったが、養蚕が衰退してからは商売繁盛の縁起物とされている。右手（前脚）を挙げている猫は金運を招き、左手（前脚）を挙げている猫は人（客）を招くとされる。両手を挙げたものもあるが、“欲張り過ぎると「お手上げ万歳」になるのが落ち”と嫌う人が多い。一般には写真のように三毛猫であるが、近年では、地の色が伝統的な白や赤、黒の他に、ピンクや青、金色のものもあり、色によっても「学業向上」や「交通安全」（青）、「恋愛」（ピンク）など、意味が違う。黒い猫は、昔の日本では『夜でも目が見える』等の理由から、「福猫」として魔除けや幸運の象徴とされ、黒い招き猫は魔除け厄よけの意味を持つ。また、赤色は疱瘡が嫌う色、といわれてきたため、赤い招き猫は病除けの意味を持つ。

置物解説

巡礼娘（人形）

全国各地の有名な寺社・霊場付近で販売されている巡礼の姿をかたどった人形。
関係性は不明だが、昭和30年に発表された演歌に「むすめ巡礼」がある。

□詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

こけし（創作首振りこけし）

こけしとは、江戸時代末期（化政文化期）頃から、東北地方の温泉地において湯治客に土産物として売られるようになった轆轤（ろくろ）引きの木製の人形玩具。一般的には、球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしている。『伝統こけし』は産地・形式・伝承経緯などにより約 10 種類の系統に分類される。他方『新型こけし』には、工芸的な「創作こけし」と、東北に限らず全国の観光地で土産品として売られている「こけし人形」がある。こけしが生まれるには、主に次の 3 つの条件が必要だったと言われている。1 つ目は、湯治習俗が一般農民に或る種の再生儀礼として定着したこと。2 つ目は、赤物が伝えられたこと。3 つ目は、木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要に直接触れるようになったこと。

虎（焼物）

虎の置物。茶色がかっているが、銅製ではなく焼き物（陶器）と思われる。
※詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

置物解説

湯のみ茶碗（九谷焼）

九谷焼（くたにやき）は、石川県南部の金沢市、小松市、加賀市、能美市で生産される色絵の磁器である。

茶碗

茶碗は茶器の一つとして中国で生まれ、奈良時代から平安時代をかけて茶と一緒に日本に伝来したと考えられている。本来、「茶碗」は茶を入れて飲むための碗を指していた。

江戸時代、煎茶の流行とともに従来からの抹茶茶碗に加えて、煎茶用の煎茶茶碗、白湯・番茶用の湯呑茶碗も用いられるようになったとされる。明治時代に入ると鉄道網の普及とともに磁器の飯茶碗が普及した。

置物解説

猫（磁器製）

詳細不明。おそらく、昭和中期に流行した置物だと推察される。

※情報をお待ちしています。

置物解説

御所人形

御所人形は江戸時代享保(1716‐36)のころつくりだされた京都産の美術的な人形。幼童のあどけない姿勢を，白磨きの肌に大きな頭と横ぶとりの丸々とした裸体で表現している。腹掛けや童直衣（わらわのうし）に烏帽子（えぼし），ずきんをかぶせたりしたものもある。最初は粘土製であったが，キリの木彫りになり，張子や練り物でもつくられた。表面には胡粉地（ごふんじ）をおいて磨きだす。元来は室町時代の祓（はらい）人形の這子（ほうこ）を人形化したものといわれる。

藤原俊男(三代目、平安錦染)

先代より平安錦染の名で京人形(雛・五月人形)と焼物の御所人形・京陶人形を制作。

置物解説

ロシア人形

ロシア人形ということだが、衣装の形から中国の少数民族のダンス衣装に酷似している。
その他詳細不明。

※お心当たりの方は情報をお寄せ下さい。

置物解説

ハワイアン人形（KELA）

Lanakila Crafts 製のフラダンス人形。同タイプの人形は 1950 年前後から製造されている。
詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

フラ

フラ（ハワイ語: hula）はハワイの伝統的な歌舞音曲である。フラにはダンス、演奏、詠唱、歌唱の全てが含まれる。カヒコと呼ばれる古典的なスタイル（古典フラ）と、アウアナと呼ばれる現代的なスタイル（現代フラ）がある。フラは総合芸術であると同時に宗教的な行為でもあり、日本の能楽と同様、単なるダンスや音楽の概念では捉えられないものである。

置物解説

戌（干支）・土鈴

戌（いぬ、じゅつ）は十二支のひとつ。通常十二支の中で第 11 番目に数えられる。前は酉、次は亥である。「戌」は「滅」（めつ：「ほろぶ」の意味）で、草木が枯れる状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の犬が割り当てられた。犬はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習がある。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

置物解説

戌（干支）・土鈴　船詰神社

　戌（いぬ、じゅつ）は十二支のひとつ。通常十二支の中で第 11 番目に数えられる。前は酉、次は亥である。「戌」は「滅」（めつ：「ほろぶ」の意味）で、草木が枯れる状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の犬が割り当てられた。犬はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習がある。

土鈴

　土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

船詰神社

　船詰神社（ふなづめじんじゃ）は、旧冨田村の氏神として古くより当地に祀られていたお宮で、明治四十四年に天神社と荒神社を、昭和五十一年には、愛宕社を合祀するようになった。現在の御社殿、社務所等は昭和五十一年の土地区画整理に際して、新しく建てたものである。

置物解説

戌（干支）・土鈴

戌（いぬ、じゅつ）は十二支のひとつ。通常十二支の中で第 11 番目に数えられる。前は酉、次は亥である。「戌」は「滅」（めつ：「ほろぶ」の意味）で、草木が枯れる状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の犬が割り当てられた。犬はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習がある。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

白井神社

東園田町。創祀年代は不詳だが、古くより歯神社の俗称で親しまれ、歯患平癒に霊験があると伝えられる。享保年間発行の『摂津誌』には、「白井天王祠穴太村に在り隣村亦各々祠を建てて之えお祀る」と記されている。　天正六年に本殿改築、宝永五年と昭和二年に拝殿改築がなされている。

犬とでんでん太鼓の人形

　お宮参りで、健やかな成長や長寿を祈願するための縁起物で、魔よけの意味を持つている。 また、犬はお産が軽いとされることから、安産については、戌の日が吉日とされ、帯祝いなどにはこの日を選ぶ風習がある。

土笛（オカリナ・ペルー製）

古代ペルーでは、インカ時代（ナスカ文化）以前から広く粘土製の吹奏楽器が用いられていた。つぼ型で胴の膨らんだ側面にある小さな孔を吹いて音を出す「つぼ型笛」はジャガーのうなり声を模倣するのに用いられた。

古代メキシコのアステカ族や南アメリカのインカには「シパクトゥリ」と呼ばれる、動物や人の形をし3から5音を出すものや、取っ手をつけた「鳴るポット」など特異な形をしたものもある。また、グアヤナとオリノコ盆地では多球形の陶器製トランペットも使われている。

ただし音楽的には、サンポーニャやケーナ（ともに葦製）などの管楽器に押され、（亀型のものをよく見かけたりするが、）あまり発達せず、民芸品として色彩が強い。

置物解説

シロクマ（schleich/シュライヒ）

シュライヒは 1935 年、フリードリッヒ・シュライヒによって設立され、そのフィギュア製品は 1950 年代、スマーフやスヌーピーなどのキャラクターフィギュアをメインに誕生し動物フィギュアは 1980 年代初期に製造スタートし現在に至るまで続々と新製品を開発している。小さなサイズでも自然を忠実に再現したフィギュアは、野生動物、牧場の動物、ペット、海洋動物、 絶滅した先史時代の動物や恐竜までをも網羅している。

置物解説

バンビ（ガラス細工）厳島みやげ

　全国各地の観光地で販売されているガラス細工の一つ。
　厳島のシカは、フェリー桟橋付近にも現れたり、マスコットキャラクターとして図案化されたりして、「宮島のシンボル」ともいうべき知名度がある。なお、厳島のシカは神の使い「神鹿（しんろく）」として神聖視されていたが、第二次世界大戦後に厳島を接収したGHQの兵士がハンティングの対象として撃っていたために激減した。現在島にいるシカは、GHQ撤退後に奈良公園から人為的に6頭移入されたものの子孫が含まれている。

置物解説

シューズ型ガラススタンド

100 円均一の卓上ガラススタンド（シューズ型）。材質はセミクリスタル。

ガラス工芸

ガラス工芸（ガラスこうげい、英語：Glass art）とは、ガラスを用いた工芸・美術の総称である。ガラス造形・ガラスアート・グラスアートと言う場合もある。日用品、骨董・アンティーク、美術品・工芸品、現代アートまで、非常に広い範囲の創作表現方法、創作物を含む。

「ガラス工芸」は、制作工法・素材・年代・地域・素材・メーカーなどに多岐の分類が可能。
その歴史は、紀元前以来のガラスの歴史に遡る。

置物解説

かに（ガラス細工）

全国各地で製造され、観光地のお土産物やで見かけるガラス細工の小さな置物。

ガラス工芸

ガラス工芸（ガラスこうげい、英語：Glass art）とは、ガラスを用いた工芸・美術の総称である。ガラス造形・ガラスアート・グラスアートと言う場合もある。日用品、骨董・アンティーク、美術品・工芸品、現代アートまで、非常に広い範囲の創作表現方法、創作物を含む。

「ガラス工芸」は、制作工法・素材・年代・地域・素材・メーカーなどに多岐の分類が可能。
その歴史は、紀元前以来のガラスの歴史に遡る。

置物解説

天使（トラピスチヌ修道院・土産）

天使（てんし）は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖典や伝承に登場する神の使いである。以下、しばしばアブラハムの宗教と呼ばれ、比較宗教論の宗教分類で並置されるこの 3 宗教の天使について叙述する。キリスト教による日本語訳聖書では「御使い」と訳される。日本ハリストス正教会では神使（しんし）とも訳す（日本正教会では「天使」という語も併用される）。近世以降、無垢な子供の姿や、女性の姿、やさしい男性の姿を取って表現されることが多くなった。これはルネサンス期にローマ神話のクピド（女神ウェヌスの子である愛の神）からイメージを借りたとされる。場合によっては童子の顔と翼だけで身体を持たない姿に描かれることもある。

トラピスチヌ修道院

トラピスチヌ修道院（トラピスチヌしゅうどういん）は、北海道函館市郊外にあるトラピスト会（厳律シトー会）系の女子修道院。日本最初の観想女子修道院である。お土産物として売られている、マダレナ（ケーキ）やクッキーが有名。

修道規律の改革が起きたとき、フランスのノルマンディー地方にある「トラップ修道院」の厳しい規律に従うシトー修道会のグループを厳律シトー修道会、修道院の場所の名を取ってトラピスト（女子はトラピスチヌ）と呼ばれるようになった。

トラピスチヌ修道院は 1898 年（明治 31 年）にフランスから派遣された 8 名の修道女によって創立された。その後 1925 年（大正 14 年）に失火で本館を焼失したが、翌年から再建に着手して 1927 年（昭和 2 年）に落成した。

シーサー

　シーサーは、沖縄県などでみられる伝説の獣の像。建物の門や屋根、村落の高台などに据え付けられ、家や人、村に災いをもたらす悪霊を追い払う魔除けの意味を持つ。名前は「獅子（しし）」を沖縄方言で発音したものである。八重山諸島ではシーシーともいう。元々は単体で設置されていたものだが、おそらくは本土の狛犬の様式の影響を受けて、阿吽像一対で置かれることが多くなった。阿吽の違いにより雌雄の別があり、各々役割があるとする説もあるが、研究文献等にそのような記述は見られず、近年になって創作された俗説である可能性が強い。口の開いたシーサーが雄で、右側に置き、福を招き入れ、口を閉じたシーサーが雌で、左側に置き、あらゆる災難を家に入れないとされている。

置物解説

くるみ割り人形

　くるみ割り人形（くるみわりにんぎょう）は、木の実を割るために用いられる人形型の道具である。
　くるみに限らずヘーゼルナッツその他の木の実にも用いられる。人間が木の実を常食としていたはるか昔から、様々な形状のくるみ割り器が考案されてきた。ベルヒテスガーデンの 1650 年の記録には"Nusbeiser"（くるみを噛むもの）という語が残っている。また、1735 年にはテューリンゲン州ゾンネベルクでくるみ噛み人形が作られたとされる。現在知られているような形式の人形型のくるみ割り器が生まれたのは、1870 年代頃で、現在のドイツ、ザクセン州のエルツ山地地方のザイフェンという小さな村でのことであったとされる。エルツ山地地方は、ザクセン州の州都ドレスデンの南、チェコとの国境沿いに位置し、幅約 40km 長さ約 130km にわたる標高 700 – 800m の緩やかな山地地帯である。最初のくるみ割り人形を制作したのは、ヴィルヘルム・フリードリッヒ・フュヒトナーで、このため彼は「くるみ割り人形の父」と呼ばれる。最初のモデルは軽騎兵、消防士、山林監視官であった。彼のフュヒトナー工房はそれ以降「くるみ割り人形の生家」と見なされ、フュヒトナー工房の人形の箱のみにその一文が明記されている。フュヒトナー工房では、伝統的デザインのくるみ割り人形を制作し続け、現在に至っている。

布袋

　布袋（ほてい）は、唐末の明州（現在の中国浙江省寧波市）に実在したとされる伝説的な仏僧。水墨画の好画題とされ、大きな袋を背負った太鼓腹の僧侶の姿で描かれる。日本では七福神の一柱として信仰されている。本来の名は釈契此（しゃくかいし）であるが、常に袋を背負っていたことから布袋という俗称がつけられた。図像に描かれるような太鼓腹の姿で、寺に住む訳でもなく、処処を泊まり歩いたという。また、そのトレードマークである大きな袋を常に背負っており、生臭ものであっても構わず施しを受け、その幾らかを袋に入れていたという。なお、布袋が背負っているこの袋は堪忍袋ともいわれる。雪の中で横になっていても布袋の身体の上だけには雪が積もっていなかった、あるいは人の吉凶を言い当てたなどという類の逸話が伝えられる。

置物解説

七福神

　七福神（しちふくじん）とは、福をもたらすとして日本で信仰されている七柱の神で、恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁才天 （弁財天）、福禄寿、寿老人、布袋の七柱の神とされる。

　一般におめでたい存在、縁起物とされる。正月に枕の下に、「七福神の乗った宝船の絵」を入れておくと、良い初夢が見られると言われる。

　七柱それぞれの社（やしろ）を順に回り、縁起を呼ぶお参りがあり、七福神めぐりと言う。

帆船模型

帆船模型（はんせんもけい）は、実際に海上を航海したもしくは歴史上存在した帆船の、忠実な縮小再現模型。完成品と組み立てキットが存在する。

かつて大航海時代をささえ 7 つの海で活躍した帆船を縮尺どおり忠実に再現した模型を指して帆船模型ということが多い。これはそもそもの帆船模型の起源が、王侯・貴族・富裕商人らが実際に帆船を製作する前に製作した検討用の模型とされているためである。そのため材質・製作方法は本物に準じることが標準で、組み立てキットとして売られている製品であっても船底の木材は数十枚のまっすぐな木の板であり、キール（竜骨）やリブ（肋材）に沿って貼り付け、微妙なカーブラインを出すのは製作者にまかされている。そのため製作には高度の工作力と、時代考証が求められ、キングオブホビー（キングスホビー）とも呼ばれる。

大航海時代のものだけではなく、ギリシャ・ローマ時代のガレー船や中国のジャンク船、明治時代に作られた日本の帆船の模型も人気があるので、言葉どおり帆船、もしくはそれに準じるものの模型と考えて差し支えはない。帆船ではない船の模型は船舶模型と呼ぶ。

置物解説

ピノキオ（人形）

『ピノッキオの冒険』（伊：Le Avventure di Pinocchio）は、イタリアの作家・カルロ・コッローディの児童文学作品。1883年に最初の本が出版されて以来、100年以上にわたり読み継がれている著名な作品である。

ある日、大工のチェリーが意志を持って話をする丸太を見つける。そこにゼペットじいさんが現れ、丸太を木の人形にし、ピノッキオと名付ける。ところがこのピノッキオは勉強と努力が嫌いで、すぐに美味しい話に騙される。話をするコオロギなどの忠告にも耳を貸さず、人形芝居の親方に焼かれそうになったり、狐と猫にそそのかされ殺されそうになったりする。終盤に巨大なサメに飲み込まれるが、マグロに助けてもらう。真面目に勉強し働くようになったピノッキオは、最後に夢に現れた妖精によって人間になる。苦難を乗り越えて人間の少年へと変化するまでの逸話が書かれている。

また、この人形はカルロ・コッローディの生まれたフィレンツェにて多く生産されている人形と推察される。

置物解説

マトリョーシカ（サンタクロース）

　マトリョーシカ人形（マトリョーシカにんぎょう、ロシア語:Ｍａｔｒёшｋａ マトリョーシュカ、Matryoshka doll）は、ロシアの木製の人形。単にマトリョーシカともいう。
　胴体の部分で上下に分割でき、中には少し小さい人形が入っている。これが何回か繰り返され、人形の中からまた人形が出てくる入れ子構造になっている。入れ子にするため腕は無く、胴体とやや細い頭部からなる筒状の構造である。6 重以上の入れ子である場合が多い。
　マトリョーシカという名称は、ロシア女性の名前からきている。それぞれの人形には女性像が描かれているのが本来のものであるが、大統領など有名人が描かれたものや、動物など人間以外のものが描かれたものなど、絵柄は各種に広まっている。日本にもマトリョーシカ人形と同じ作りで、だるまなどの入れ子人形がある。

ボトルシップ（長崎のお土産）

ボトルシップ（和製英語。英語名は ship in a bottle）は、帆船などの模型が、それよりも小さな口を持つ瓶（ボトル）の中に入っている工芸作品。しばしば趣味のひとつとして作成される。

1800 年前後に、ある船乗りが飲み終わった酒瓶と船の中にある材料だけで作ったのが始まりとされているが、詳細は不明。日本には大正時代初期に伝わっており、習志野俘虜収容所のドイツ兵が作ったというボトルシップが今も残されている。一般に広まったのは昭和期に入ってからである。

置物解説

シロクマと柵のフィギュア（100 円均一製）

100 円ショップで販売されている動物シリーズのフィギュア。
今回展示されている置物の中では新しく、購入可能な大量生産品。

ホッキョクグマ（白くま）

ホッキョクグマ（北極熊、Ursus maritimus）は、動物界脊索動物門哺乳綱ネコ目（食肉目）クマ科クマ属に分類されるクマ。

置物解説

Alfa Romeo GIULIA Sprit GTA（ミニカー）

ジョージアオリジナル ヨーロッパ名車シリーズ、アルファ ロメオ×京商　歴代名車コレクション～全6種～のひとつ。1/72 スケール。

1965 年、ジウジアーロのデザインした美しいスタイルは GIULIA Sprit GT のまま、ボディ材質をアルミ製にして軽量化したレース向けモデル。DOHC 直列 4 気筒 1570cc エンジンは合金で、アルミ素材を多用、チューンアップと軽量化が施され、車両重量は約 745kg となり、当時の 1.6ℓ級シーターとしては世界でも最速を誇った。

【材質】ボディー：亜鉛合金、シャーシ・ホイル：ABS、ウィンドウ：PS、タイヤ：TPR、袋：PP、取扱説明書：紙　※付属解説書より

ぽぴん

　ぽぴんは、近世のガラス製玩具。ぽっぺん、ぽんぴん、ぽっぴんともいい、ガラス製なのでビードロともいう。首の細いフラスコのような形をしていて、底が薄くなっており、長い管状の首の部分を口にくわえて息を出し入れすると気圧差とガラスの弾力によって底がへこんだり出っ張ったりして音を発する。福岡県の筥崎宮の放生会では、「ちゃんぽん」と呼ばれ頒布されているが、長崎県の名物である同名の麺料理とは無関係である。

香水瓶

アンティークの香水瓶。本来香水を入れる容器だが、実用性よりも観賞用に適している。
詳細不明。情報をお持ちの方は下にご記入下さい。

福助人形・土鈴

福助人形（ふくすけにんぎょう）は、幸福を招くとされる縁起人形。正座をした男性で、大きな頭とちょんまげが特徴。頭が大きな人の比喩にも用いられる。

元々は、文化元年頃から江戸で流行した福の神の人形叶福助。願いを叶えるとして茶屋や遊女屋などで祀られた。叶福助のモデルとなった人物も実在したと言われている。松浦清の『甲子夜話』にも登場する。当時の浮世絵にも叶福助の有掛絵が描かれ、そこには「ふ」のつく縁起物と共に「睦まじう夫婦仲よく見る品は不老富貴に叶う福助」と書かれている。

一説に、享和２年８月に長寿で死去した摂津国西成郡安部里の佐太郎がモデルである。もともと身長２尺足らずの大頭の身体障害者であったが、近所の笑いものになることをうれい、他行をこころざし東海道を下る途中、小田原で香具師にさそわれ、生活の途を得て、鎌倉雪の下で見せ物にでたところ、評判がよく、江戸両国の見せ物にだされた。江戸でも大評判で、不具助をもじった福助の名前を佐太郎に命じたところ、名前が福々しくて縁起がよいと見物は盛況であった。見物人のなかに旗本某の子がいて、両親に遊び相手に福助をとせがんで、旗本某は金 30 両で香具師から譲り受け、召し抱えた。それから旗本の家は幸運つづきであるのでおおいに寵愛され、旗本の世話で女中の「りさ」と結婚し、永井町で深草焼をはじめ、自分の容姿に模した像をこしらえ売りにだした。その人形が、福助の死後、流行した、という。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

置物解説

浙江大学の記念品

浙江大学（せっこうだいがく、ピンイン：Zhèjiāng Dàxué、英称：Zhejiang University）は、中国で最も歴史がある重点大学の一つである。1897 年に求是書院（ピンイン：Qushì Shūyuàn）として設立された。略称は ZJU および Zheda。中国で最も早く創立された四大学府の一つであり、吉林大学に次ぐ中国最大規模の総合大学である。浙江省の省都である杭州市に位置する。

中国の主要な研究機関の一つであり、かつて「東洋のケンブリッジ」として知られていたが、1952 年の中国の教育改革で、いくつかの単科大学に分かれた。1998 年、国家評議会の承認を経て、浙江農業大学、浙江医科大学、杭州大学を吸収合併した。

同国内で清華大学、北京大学、に次ぎ、上海交通大学、南京大学、復旦大学等に並ぶ上位の大学とされる。

置物解説

帆船型スタンドライト

帆船模型に電源コードとバルブソケットが一体となっている置物。帆船模型は、実際に海上を航海したもしくは歴史上存在した帆船の、忠実な縮小再現模型。完成品と組み立てキットが存在するが、これは完成品に相当する。

かつて大航海時代をささえ７つの海で活躍した帆船を縮尺どおり忠実に再現した模型を指して帆船模型ということが多い。これはそもそもの帆船模型の起源が、王侯・貴族・富裕商人らが実際に帆船を製作する前に製作した検討用の模型とされているためである。そのため材質・製作方法は本物に準じることが標準で、組み立てキットとして売られている製品であっても船底の木材は数十枚のまっすぐな木の板であり、キール（竜骨）やリブ（肋材）に沿って貼り付け、微妙なカーブラインを出すのは製作者にまかされている。そのため製作には高度の工作力と、時代考証が求められ、キングオブホビー（キングスホビー）とも呼ばれる。

大航海時代のものだけではなく、ギリシャ・ローマ時代のガレー船や中国のジャンク船、明治時代に作られた日本の帆船の模型も人気があるので、言葉どおり帆船、もしくはそれに準じるものの模型と考えて差し支えはない。帆船ではない船の模型は船舶模型と呼ぶ。

置物解説

指人形（繭製）

胴体を袋状に作り、その中に手を入れて指先でさまざまな動作をさせる人形。

繭

繭（まゆ）は、活動が停止または鈍い活動状態にある動物を包み込んで保護する覆いをいう。動物から分泌されたもの、または砂利などの体外の物質の覆いを指し、毛のような体の一部の保護器官のことではない。

一般的には昆虫、特にガにおける、絹糸の繊維質のものをさす。更に狭い意味では、カイコのそれを指し、絹糸の原料である。

招福狸（人形・木製）

室町時代以降のてまり歌に「雨のしょぼしょぼ降る晩に、豆狸（まめだ）が徳利もって酒買いに」という節がある。置物狸が大流行したのは、この「酒買い小僧」スタイルの狸。

灘の造り酒屋では、酒蔵に豆狸が住んでいないとおいしい酒が造れないという話がある。それ程古い酒蔵、古い伝統と経験がないとよい酒が造れないという例えである。その清酒は慶長年間に完成し、江戸初期から一般庶民の口に入るようになり、酒は徳利をもって行って、酒屋で樽から注いでもらいもって帰ったもので、その使い走りを子供にさせた。酒買い小僧の狸の置物は、その姿をタヌキの置き物にしたものである。

置物解説

酒器（錫器）

酒器（しゅき）は酒を取り分けたり、供したり、飲むときに用いられる道具。
元々は祭祀器としての性格が強い。

錫

日本には、スズそのものの加工品としては奈良時代後期に茶とともに持ち込まれた可能性が高い。今でいう茶壷、茶托などであろうと推測される。金属スズは比較的毒性が低く、酸化や腐食に強いため、主に飲食器として重宝された。現在でも、大陸喫茶文化の流れを汲む煎茶道ではスズの器物が用いられることが多い。日本独自のものには、神社で用いられる瓶子（へいし、御神酒徳利）、水玉、高杯などの神具がある。いずれも京都を中心として製法が発展し、全国へ広まった。
それまでの特権階級のものから、江戸時代には町民階級にも慣れ親しまれ、酒器、中でも特に注器としてもてはやされた。京都、大阪、鹿児島に、伝統的な錫工芸品が今も残る。近年では日本酒用以外にビアマグやタンブラーなどもつくられるようになった。また、一部の比較的高級な飲食店では日本酒の燗に、こだわりとして高価であるスズ製ちろりを使用するところがある。科学的には定かではないが、錫製品は水を浄化し雑味が取り除かれ、酒がまろやかになると言われている。
また、融点が低いことを利用してフロートガラスの製造にも使われている。

置物解説

たぬき・土鈴

たぬきは「他を抜く」と言われ、商売繁盛の縁起物として周知される。 狸は、結婚祝い、引越祝い、新築祝い、開店祝い、開業祝いなどでの贈り物として、人気があり、 玄関などの置物にされる

。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

置物解説

でんでん太鼓（善光寺土産）

　でんでん太鼓（でんでんだいこ）は、日本の民芸玩具。棒状の持ち手がついた小さな太鼓の両側に紐があり、その先には玉が結びつけてある。持ち手を高速で往復回転させることにより、玉が太鼓の膜に当たり、音を立てる。雅楽で用いられる「振鼓」（ふりつづみ）をモデルとしている。

　太鼓と名がつくものの、楽器として用いられることはほとんどなく、特に小さな子どもをあやすのに用いられるのが一般的である。

善光寺

　善光寺（ぜんこうじ）は、長野県長野市元善町にある無宗派の単立寺院である。山号は「定額山」（じょうがくさん）。

　山内にある天台宗の「大勧進」と 25 院、浄土宗の「大本願」と 14 坊によって護持・運営されている。「大勧進」の住職は「貫主」と呼ばれ、天台宗の名刹から推挙された僧侶が務めている。「大本願」は、大寺院としては珍しい尼寺である。住職は「善光寺上人」と呼ばれ、門跡寺院ではないが代々公家出身者から住職を迎えている特徴として、日本において仏教が諸宗派に分かれる以前からの寺院であることから、宗派の別なく宿願が可能な霊場と位置づけられている。また女人禁制があった旧来の仏教の中では稀な女性の救済（女人救済）があげられる。

置物解説

土鈴（山陰路）

　山陰路土産の土鈴。土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

山陰路

　山陰路（さんいんじ）は、日本の街道である。京から丹波を経て山陰地方へ向かう。主に山陰街道（さんいんかいどう）と呼ばれ、山陰道（さんいんどう）、丹波街道（たんばかいどう）、丹州街道（たんしゅうかいどう）、丹波路（たんばじ）、丹州路（たんしゅうじ）とも呼ばれた。しかし、明治時代に京都府令により「山陰街道」の名称に統一された。現在の国道９号線は、これにほぼ沿っている。

　なお、古代・中世における山陰道と近世の山陰街道は、ルートが異なっている。

大津絵・土鈴（徳利型）

大津絵（おおつ–え）とは、滋賀県大津市で江戸時代初期から名産としてきた民俗絵画で、さまざまな画題を扱っており、東海道を旅する旅人たちの間の土産物・護符として知られていた。大津絵の画題を唄い込んだ元唄・音曲・俗曲（大津絵節）、大津絵節を元に踊る日本舞踊の一種（大津絵踊り）にも、「大津絵」の名がついている。東海道、逢坂関の西側に位置する近江国追分（髭茶屋追分）を発祥の地とする。寛永年間（1624– 1644 年）のころに仏画として描かれ始めた。当初は信仰の一環として描かれたものであったが、やがて世俗画へと転じ、加えて 18 世紀ごろより教訓的・風刺的な道歌を伴うようになった。松尾芭蕉の俳句「大津絵の筆のはじめは何佛」には、仏画が多かった初期の大津絵の特徴が表れている。これには両面に『鬼の寒念佛』『藤娘』の絵柄がプリントされている。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

鬼瓦・土鈴

鬼瓦（おにがわら）は和式建築物の棟（大棟、隅棟、降り棟など）の端などに設置される板状の瓦の総称。略して「鬼」とも呼ばれる。厄除けと装飾を目的とした役瓦の一つ。鬼瓦を題材にした狂言の演目「鬼瓦」のこと。鬼瓦は、棟の末端に付ける雨仕舞いの役割を兼ねた装飾瓦で、同様の役割を持つ植物性や石、金属などの材料で葺かれた屋根に用いられるものを「鬼板（おにいた）」というが、鬼面が彫刻されていない鬼瓦も鬼板という。一般的に鬼瓦といえば、鬼面の有無にかかわらず棟瓦の端部に付けられた役瓦のことをいう。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

雪ん子人形（戸隠）

戸隠の土産もの人形。戸隠は長野県の急峻な戸隠山の山容と裾野に広がる豊かな水が、古くから農耕民に仰がれ、この水をつかさどる神の住む所とあがめられていた。修験道が入り込んだのは嘉祥２年（８４９年）と言われている。信仰と修験者のメッカとして栄えた名残が戸隠神社や宿坊にみられ、古き御神楽、懐かしい祭りの数々が献奏される。現在でも毎年春から秋にかけて全国から講仲間が大勢この地を訪れる。

置物解説

十牛図「騎牛帰家」・鉄像

　十牛図（じゅうぎゅうず）は、禅の悟りにいたる道筋を牛を主題とした十枚の絵で表したもの。十牛禅図（じゅうぎゅうぜんず）ともいう。中国宋代の禅僧、廓庵（かくあん）によるものが有名。その一つ、騎牛帰家(きぎゅうきか − 牛の背に乗り家へむかうこと)を題材としたもの。悟りがようやく得られて世間に戻る姿をイメージし制作されたと考察される。

※下部の牛は紛失している模様。

置物解説

三三九度（錫器）

三三九度（さんさんくど）は神前の結婚式に見られる固めの儀式のひとつ。三献の儀ともいう。これは婚礼時のおめでたい固めの盃として、日本の共食信仰に基づいて夫婦および両家の魂の共有・共通化をはかる擬制行為。男女が同じ酒を飲み交わすというもので、初めに女性が三度、次に男性が三度、最後に女性が三度の合計九度飲む。古代中国の陰陽に由来する儀式で、陽の数である三や九が用いられた。

三三九度は神前式以外の和の人前式の儀式としても取り入れられている。 人前式の儀式としては他に「水合わせの儀」「貝合わせの儀」等がある。

錫

日本には、スズそのものの加工品としては奈良時代後期に茶とともに持ち込まれた可能性が高い。今でいう茶壷、茶托などであろうと推測される。金属スズは比較的毒性が低く、酸化や腐食に強いため、主に飲食器として重宝された。現在でも、大陸喫茶文化の流れを汲む煎茶道ではスズの器物が用いられることが多い。日本独自のものには、神社で用いられる瓶子（へいし、御神酒徳利）、水玉、高杯などの神具がある。いずれも京都を中心として製法が発展し、全国へ広まった。
それまでの特権階級のものから、江戸時代には町民階級にも慣れ親しまれ、酒器、中でも特に注器としてもてはやされた。京都、大阪、鹿児島に、伝統的な錫工芸品が今も残る。近年では日本酒用以外にビアマグやタンブラーなどもつくられるようになった。また、一部の比較的高級な飲食店では日本酒の燗に、こだわりとして高価であるスズ製ちろりを使用するところがある。科学的には定かではないが、錫製品は水を浄化し雑味が取り除かれ、酒がまろやかになると言われている。

また、融点が低いことを利用してフロートガラスの製造にも使われている。

日本人形

日本人形（にほんにんぎょう）は、和服を着、日本髪を結った、日本の伝統的な風俗を写した人形の総称である。一般に日本人形という場合、「市松人形」や「衣裳人形」のことが多い。一般家庭等で置物として飾られる工芸品としての他、美術的価値の高い品もある。

1927年（昭和2年）にアメリカ合衆国に市松人形が人形大使として贈られた際に、「日本人形」の説明が付けられた。日本人形の中でも、節句人形は伝統的にその手や足、頭（顔）、髪結い、衣裳の仕立てなどそれぞれを専門に製作を受け持つ人形工芸師が分業している。製作において人形は順番に人形工芸師の手によって組み立てられる。そして、最終的に衣裳の着物を着付ける人形着付け師のもとで、完成まで仕上げられる。一般によくいわれる、有職人形はこのような製作手順がとられている。主に京都、東京で製作される。

置物解説

白鳥（ペーパーブロック）

ペーパーブロックとは、小さな三角形の折り紙を積み上げて、さまざまなものを作る手芸。

本来とは病気治療のリハビリのために創られたもの。主に鳥類を目にすることが多いが、動・植物、昆虫など種類は多彩である。

置物解説

サトちゃん（ソフビ貯金箱）

サトちゃんは、日本の製薬会社、佐藤製薬のゾウを模したマスコットキャラクター。ゾウは長生きであり、健康で明るくて子供から大人まで幅広く愛されている動物であることから「象は健康と長生きのシンボル」であるととらえ、キャラクターがゾウに決定された。1955 年 6 月、佐藤製薬の印刷物にはじめてゾウのイラストが登場。 このイラストは、現行のサトちゃんのような極端にデフォルメされたものではなく、より本物に近い鼻の長いゾウであった。

1959 年 4 月、店頭ディスプレイ用の子象（チビゾウ）が誕生。キャラクターデザインは『ブーフーウー』の生みの親である劇作家の飯沢匡と童話画家の土方重巳の 2 人が手掛けた。

同年 10 月、応募総数 4 万 6600 通のなかから「サトちゃん」と命名され、新聞各紙やポスター・フジテレビなどで命名決定の発表が一斉に行われた。

その後も、ポーズ変更やリニューアルを重ね、店頭ディスプレイに加え、数多くのキャラクターグッズが存在している。

置物解説

貴婦人のベル

ディナーベルは家族や客に食事の用意のできたことを知らせる鈴。本来は食卓におかれて使用される。大きな会場ではスピーチの際、注目を促す道具として使用される。

※その他詳細不明

置物解説

翡翠 の 熊

アメジストと熊の置物。カナダのブリティッシュ・コロンビア州原産のカナダ翡翠（B.C.Jade）。主に B.C.州とユーコン準州の境で産出され、翡翠はジェダイドとネフライトという種類がある。B.C.ジェイドは主にネフライトで、綺麗な深緑色をしており、昔から『聖石』として崇められていて、パワーストーンでは翡翠は災いや呪いを退け精神力を高めるとされる。カナダのおみやげとしてポピュラーなヒスイは熊の置物として彫刻されたりアクセサリーに加工される。

置物解説

「寿鶴」または「祝い鶴」・折り紙

羽が屏風のように華やかな鶴。お正月や結婚式など晴れの日の演出に。寿鶴は鏡餅の上にのせたり、屠蘇のつるに水引でとめてみたり、また大きく作って、中を開くと鏡餅やおめでたいものも入れられる。

折り紙

折り紙（おりがみ、折紙）とは、紙を折って動植物や生活道具などの形を作る日本伝統かつ、日本起源の遊び。また、折り上げられた作品そのものや、折り紙用に作られた正方形の専用紙のことも指す。
近年では折り紙の芸術的側面が再評価され、昔にはなかった複雑で優れた作品が生み出され、各国に伝承する折り方に加えて、新しい折り方も考案され続けている。
また、折り紙の持つ幾何学的な性質から、数学の一分野としても研究されている。

置物解説

おかめ

おかめは、古くから存在する日本の面（仮面）の一つ。丸顔、鼻が低く、額は広く、頬が丸く豊かに張り出した（頬高）特徴をもつ女性の仮面であり、同様の特徴を持つ女性の顔についてもそう呼ぶ。

お亀、阿亀（おかめ）とも書き、お多福、阿多福（おたふく）、文楽人形ではお福（おふく）、狂言面では乙御前（おとごぜ）あるいは乙（おと）ともいう。

「おたふく」という名称は、狂言面の「乙」（乙御前）の「オト」音の転訛ともいわれる。ほかにも「福が多い」という説と、頬が丸くふくらんだ様から魚の「フク」（河豚・ふぐ）が元という説もある。「阿多福」は、「阿多福面」（おたふくめん）の略であり、醜い顔であるという意図で女性に対して浴びせかける侮辱語として使用されることがある。

鞠くす玉・折り紙

二十数個のパーツを作って、糸と針でまとめて作るタイプのくすだま。インテリアとして飾られたり、老化を抑制する働きが注目される。この形は基本形の変形タイプ。

折り紙

折り紙（おりがみ、折紙）とは、紙を折って動植物や生活道具などの形を作る日本伝統かつ、日本起源の遊び。また、折り上げられた作品そのものや、折り紙用に作られた正方形の専用紙のことも指す。

近年では折り紙の芸術的側面が再評価され、昔にはなかった複雑で優れた作品が生み出され、各国に伝承する折り方に加えて、新しい折り方も考案され続けている。

また、折り紙の持つ幾何学的な性質から、数学の一分野としても研究されている。

置物解説

夫婦たぬき・土鈴

たぬきは「他を抜く」と言われ、商売繁盛の縁起物として周知される。 狸は、結婚祝い、引越祝い、新築祝い、開店祝い、開業祝いなどでの贈り物として、人気があり、 玄関などの置物にされる。また、たぬきはあまり攻撃的な性格はしていないことから、自分たちのなわばりに他のタヌキたちが入ってきても互いを避けるだけで争うことなく、メスをめぐったオス 同士の戦いもほとんどない。

タヌキのメスの妊娠期間はおよ そ2か月で、オスのタヌキはその間ずっとメスのそばに 付き添い、さらに子供が産まれた後もメスのもとへと餌を運んで子育てを 手伝う。逆にメスが食べ物を探しに行っている間に子供の面倒をみる。

土鈴

土鈴（どれい）は、粘土を焼成して作られた土製の鈴。縄文時代の遺跡や古代の祭祀遺跡から発見される。小林達雄の定義する機能や用途が正確に特定できない「第二の道具」に属し、同様の楽器には土笛や石笛がある。郷土玩具や縁起ものとして江戸時代以降に作られている素焼きに絵付けをした土鈴もある。この場合は、量産するため、あらかじめ中空になるように考えて作った型を半分に割った２つの木型に粘土を押し付けて外身をつくり、ある程度乾燥させてから中に丸玉を入れて貼りあわせ、そして焼成して鈴の形状が作られる。

置物解説

屏風（ミニチュア）

屏風（びょうぶ）とは、部屋の仕切りや装飾に用いる家具のこと。小さなふすまのようなものを数枚つなぎ合わせて、折りたためるようにしてある。「風を屏（ふせ）ぐ」という言葉に由来する。基本的な構造は、矩形の木枠の骨格に用紙または用布を貼ったもので、この細長いパネルを一扇といい、向かって右から第一扇、第二扇と数える。これを接続したものが屏風の一単位、一隻（一畳、一帖）である。向かって右側の屏風を右隻、左側の屏風を左隻と呼ぶ。画面周囲には縁（ふち）がめぐらされる。

奈良・平安時代は一隻六扇（六曲）が一般的で、各扇を革紐などでつなぎ、一扇ごとに縁をつけていた。鎌倉時代に紙製の蝶番が案出され、現在のように前後に開閉可能になった。また、縁も二扇ごと、更に一隻全体にめぐらされる様になり、屏風全体が一続きとなる大画面が実現した。14 世紀前半代に二隻（一双）を単位とする、六曲一双形式が定型となる。江戸時代に入ると二曲や八曲の屏風も出現した。

日本舞踊、歌舞伎等のパフォーマンスの背景におかれることも多い。 また古典園芸植物の屋内展示の際にもバックとして用いられることが多い。

大黒天

　大黒天（だいこくてん）とは、ヒンドゥー教のシヴァ神の化身であるマハーカーラのことである。神道の大黒天 – 密教の大黒天が元になり、大国主命と神仏習合して出来た神道の神で、七福神の一柱としても知られる。日本においては、大黒の「だいこく」が大国に通じるため、古くから神道の神である大国主と混同され、習合して、当初は破壊と豊穣の神として信仰される。後に豊穣の面が残り、七福神の一柱の大黒様として知られる食物・財福を司る神となった。室町時代以降は「大国主命（おおくにぬしのみこと）」の民族的信仰と習合されて、微笑の相が加えられ、さらに江戸時代になると米俵に乗るといった現在よく知られる像容となった。現在においては一般には米俵に乗り福袋と打出の小槌を持った微笑の長者形で表される。
　袋を背負っているのは、大国主が日本神話で最初に登場する因幡の白兎の説話において、八十神たちの荷物を入れた袋を持っていたためである。また、大国主がスサノオの計略によって焼き殺されそうになった時に鼠が助けたという説話（大国主の神話#根の国訪問を参照）から、鼠が大黒天の使いであるとされる。

恵比寿（ゑびす）

日本の神。七福神の一柱。狩衣姿で、右手に釣り竿を持ち、左脇に鯛を抱える姿が一般的。本項で詳述。また、初春の祝福芸として、えびす人形を舞わせてみせた大道芸やその芸人のことも「恵比須（恵比須回し）」と呼んだ。えびすは日本の神で、現在では七福神の一員として日本古来の唯一（その他はインドや中国由来）の福の神である。古くから漁業の神でもあり、後に留守神ともされた[1]。夷、戎、胡、蛭子、”蝦夷”、恵比須、恵比寿、恵美須などとも表記し、えびっさん、えべっさん、おべっさんなどとも呼称される。えびすはえびす神社にて祀られる。日本一大きいえびす石像は舞子六神社にあり商売繁盛の神社とされている。

置物解説

木うそ（太宰府）

木うそは、アトリ科に属す野鳥、ウソ(鷽)をかたどったものとされ、太宰府天満宮(だざいふてんまんぐう)をはじめとして、天神をまつる各地の神社で縁起物として作られてきた。参詣した人が、木うそを互いに交換し合う行事がうそ替えで、鷽(うそ)と嘘(うそ)をかけて、一年の嘘を誠と取り替えるなどと言われる。太宰府天満宮では、1 月 7 日の夜、鬼すべの行事が始まる前に、うそ替えが行われる。楼門前の広場に集まった参詣者が「替えましょ、替えましょ」と言いながら、手にした木うそを交換し合う。その中には金のうそが紛れ込ませてあり、それに当たった人はその年の幸運を得るとされる。木うそは、本来うそ替えのために作られたものだが、縁起物、民芸品としても多く販売されている。おもにホオノキなどを素材とし、木の肌を薄く細長く削って鳥の羽(はね)に見立てている。

置物解説

エゾシカの剥製・ハンティングトロフィー

ハンティング・トロフィーは、本来ハンターに狩られ、成功した記念品として動物の体から獲得されるアイテムを指す。頭、または体全体は剥製師によって処理される。

同様に歯、牙や角などの部位がトロフィーとして使われることもある。このようなトロフィーはハンターの家またはオフィスで特注の「トロフィー室」で展示される。